

も、「汝好持是語持是語者即是持無量壽仏名」とあり、又阿弥陀經にも「執持名号若一日乃至七日」とある事によつても、才十八願の王本願なる事が証明されるのである。

この王本願である念仏は万徳の歸する所である。弥陀一仏のあらゆる四智・三身・十力・四無畏等の一切の内証の功德と、相好・光明・説法・利生等の一切の外用の功德が皆悉く阿弥陀仏の名号の中に攝せられている。即ち名号は万徳の所歸、万機普益なのである。

以上の様に法然は善導の觀經疎によつて本願の念仏に遭つたのである。他の仏の本願を見ると、いかなる人、時、処に平等に行ぜられる本願を誓われたものは見られないのである。弥陀においてのみ若くは不生者不取正覺と生因本願を誓われたのである。念仏往生要義抄には、「阿弥陀ほとけの本願は、末代のわれらかためにおこし給へる願なれば、利益いまの時に決定往生すべき也」と云われている様に、善導・法然はこの本願にだけ、極惡の衆生がそのまま永遠の大生命に完全に生かされ得る為の易

行易修の念仏、弥陀の慈悲のふかき、即ち他力の救済確實なることを、見出されたのである。

法然上人に於ける戒と念仏の研究

松 谷 広 照

法然上人以前は、三学による解脱を説いていたのであるが、三学による解脱は我々凡夫には、なし難いものとして、法然上人は三学の他なる道を求められた結果、本願行であり、勝易の行である念仏を得られ、専修念仏を提唱して、仏教実践の根本として重んぜられる戒もまた本願行でないが故に捨てられたのである。しかしまた他面自身戒を遵守され、戒を授けられているのであつて、こゝに問題が起つてくるのである。私はこの問題について、雜行としての戒、助業としての戒、念仏信心確立の戒と、章を設けて考察してみたわけである。

戒は仏教に歸依した者は、皆ことごとく守らなければ

ならない規範にもかゝらず、法然上人が雑行として捨てられたのは何故であつたろうか、一体法然上人が新しく浄土宗を立てた根本的立場は、時機相応の仏教を明かにする所にあつた。ところが戒を持つという事は機即ち自己を観る時、それは罪惡生死の凡夫であり、時即ち時代を観る時、それは末法の世であつて、自己が罪惡深重のものであるという罪惡觀と、現實世界が末法の世であるという末法觀の二つの面から考えるとき、戒による往生はとても出来ないとして、戒を捨てられ、本願力に蘇生されたのである。

次に助業としての戒はどの様なものであろうか。法然上人は本願の行は称名念仏のみであつて、持戒の行は非本願の行であるから、たえられるだけたもてといわれたように、称名念仏そのものに於いては、他の行は何も必要としないのである。それではこゝに、たえられるだけたもてといわれる戒は、念仏に対してどの様な意味をもっているものであろうか、これは念仏の助業として修せられるものといわなければならない。法然上人は選択集に

於いて同類助業と異類の助業との二種を説いているのである。同類助業とは五種正行中の前三後一の正行の事であるが、異類の助業とは、この五種正行以外のもの、即ち諸行雑行といわれるものが、念仏を助成する行となる時には、これらすべてを念仏の助業としておられる。戒も又この異類の助業とされるのである。

造罪の為に念仏の行を退転する恐れがある上からは、身をつゝしみ行いを正す事によつて、よりますます念仏にいそしまれうる事は、浄土行者として望ましい事であるからして、この戒を勤められたのである。

五逆の罪人でも救われる念仏ではあるけれども、實際の生活に於いては、小罪をも犯かすまいという事が肝要な事となるのである。従つて念仏行者にとつて、授戒が意味をもつ事になる。即ち授戒の作法に依つて、正しく三聚淨戒を受けて、これを持つ事を誓うという事は、授戒の後に例え惡心が起り、惡行をなして、破戒するような事があるにしても、瞬間的でも良いから戒を受ける事が、後の反省に於いて良い因縁となり、念仏を修して行

く事の助けとなるのである。法然上人が兼実や彼の妻である北政所等に授戒されたのもかくの如き立場より、理解されたのである。

念仏しながらも、罪を造つたり、懈怠におちたりして生活を正しく持続してゆく事がむづかしく、戒を助業として念仏を助成する事が説かれたのである。

かくして念仏が相続されて、一たび念仏の信心が確立すれば、助業としての戒は更に念仏の行を助成してこれを増進し、ついに念仏の中に戒が全うされ、念戒一致の状態が現れるのである。即ち眞の念仏者となつて称名念仏が、阿弥陀仏の本願にかなつた行である事を知り、ひとたび称名念仏を相続出来る様になれば、弥陀の光明攝取の益にあづかり、自らのみにくい心が反省されてくるのである。これまでの様な障害や誘惑によつて、心が乱れ悪い行為をなす自己がはづかしくなり、その様な行為が出来なくなつてくるのである。これは即ち三心具足の念仏が申される事によるのであつて、この三心はひたすら念仏にはげむうちに、自ら具足するものである。かく

て三心具足の念仏が修せられてくると、自ら惡を廢し善に進む生活があらわれてくるのである。故に称名念仏を修して行くならば、持戒するのと同じ働きがあるのである。

三心を具足した眞の念仏者であつたならば念仏がはげまれて、自ら罪が滅せられ、良い行為がなされて行くものである。されば念仏の信心確立とは如何なる事であるかというに、我々が信仰に目覺めていない者には、我々は罪惡の替にあつて、仏を認識せずに煩惱につままれ罪惡を造り、しかも自己の犯している罪を罪とも思わずして、平気で造罪しているのである。即ち我と仏とは遠離している為に、罪惡とか煩惱とかいうものになじんで、罪を重ねているのであるが、我々が一たび信心確立をした後に於いては、念仏する事によつて、それまでとは反対に、仏の光明に照らされて、罪を犯す自己を認識せずにはおられなくなつてくるのである。

信前に於いては罪を罪とも思つていなかつたのであるが、信後に於いては、阿弥陀仏の存在を認識するように

なり、常に阿弥陀仏の光明に照らされる。即ち阿弥陀仏に抱かれ、仏の働きかけの中に、生きているのであると自覚する事によつて、浮かぶせなき自己を発見する時、阿弥陀仏の前に懺悔せずにはおれなくなつてくるのである。自分の犯した罪に驚くと同時に懺悔する時、犯してはならない事を覚知して、悪い事は出来なくなり、廃悪修善の生活が出てくるのである。この廃悪修善の生活こそ、戒を全うして得られる処の生活であつて、こゝに戒は念仏の中に実現されるものであるという事が出来るのである。かく考えてくると、先に挙げた問題点及び法然上人の戒に対する考え及び態度が理解されたのである。

インターネット公開許諾のない文章には
墨消し処理を施しています。